

# 私たちのシユウカツ

安城特別

支援学校の1年

新型コロナウイルス感染症の拡大は、安城市の安城特別支援学校高等部三年生の就職活動にも大きな打撃を与えそつだ。就職に向けて欠かせない、産業現場での実習の実施が危ぶまれるなど、暗雲が立ち込める。先の見えない不安に、教員たちも翻弄されている。

## 4月・予期せぬ事態

「生徒たちへの進路指導をどう進めればいいのか」

「四月に予定していた保護者への説明会は、どこで実施しようか」。十三日午後、西堀哲夫教頭と進路指導主任の説田智洋教諭は校内の一室で顔をつきあわせ、うなづいた。休校が続くなか、進路指導計画は大幅な変更を迫られている。

企業が高校生に求人票を送付する解禁日は七月一日。特別支援学校では、生徒はまず、就職を希望する企業で実習を受ける。生徒の個性を理解してもらい、企業側が受け入れを整える。その後「指名求人」を経て、九月の入社試験に挑む流れだ。

例年だと、三年生の実習は六月の二週間。しかし休



①実習受け入れの状況について西堀教頭に報告する説田教諭 ②生徒の姿のない実習室で学校再開に向けて準備する教員ら ③生徒が木工作業に取り組み教室も静まり返っていた。いずれも安城市の安城特別支援学校で

校が五月末まで延長されるなど先行きが見通せない。「実習に向けた事前指導は、どこでどう行うべきか」と西堀教頭は頭を抱える。

三年生六十八人のうち、一般企業への就職希望者は約二十人。昨年度末までは「好景気や障害者雇用への理解の広がりもあって、企業からの反応は非常に良かった」と説田教諭。受け入れ可能を積極的に知らせてくれる企業もあったほどで、「三月には全員の实習先が決まり、順調だと喜んでいました」といふ。しかしコロナ禍が状況を一変させた。四社からは断りがあり、受け入れの了承が得られたのは四社のみ。「実施の方向で検討中」という企業もあれば、「この状況が続けば難しい」「今は返事ができない」「今後は返答もあきない」と厳しい返答もある。新たな実習先を探そうにも、感染予防策で社内への立ち入りを制限している企業も多く、面会の約束も難しい。

「実習で企業側に仕事ができるのを見せなければ、なかなか就職に結び付かない」と説田教諭。生徒自身も、実習なしでは仕事内容や職場の雰囲気うまかつかめず、就職後の定着率が下がる心配がある。授業も遅れる。「どの教科も、ただ知識を教えるだけではない」と西堀教頭。仕事をやる上で大切な「安は尽きない」「これまでを付けければ就職できる」と生徒に伝え、一緒に頑張っ

てきた」と説田教諭。「今年度は頑張っても駄目かもしれないなんて、生徒に言いたくないですよ。絶対に」

嫌な予感が脳裏をよぎるが、立ち止まるわけにはいかない。「何としても、全員の实習先を見つけてます」と説田教諭は自らを追い込むように繰り返した。

# 「何とんでも実習先を」

安城市の安城特別支援学校の就職活動の様子を取材し、随時掲載します。次回は五月、三年生の生徒や保護者の就職に向けた思いに迫ります。